

「ぼくの伯父さん」(長谷川四郎)の分析

白 井 宏

ぼくの伯父さん

この題名は、今から展開される物語が、童話風の内容であることを想像させる。つまり、ぼくは小さい子供であり、そのぼくの優しい伯父さんの物語り。ところが、実際に読み進めていくと、その予想の半ばは外れてしまう。伯父さんは八十年輩ということになっている。ということは、当然ぼくも相当な年輩ということになるのだろう。少なくとも子供ではない。

しかし、ぼくと伯父さんという間柄は、親子とか、夫婦とか、兄弟とか、同級生とか、そういうものとは基本的に違う、どこかメルヘンのようなほのぼのとした情緒を持っていて、しかもそれは、子供時代から何十年か経過しても、そのまま平行移動して保たれるようなものである。そういう童話の基調音(いくらか甘く、そしていくらかもの悲しい)が、この風変わりな物語り全体に、ほのかにしかしはつきりと流れている。

伯父は元来、「叔父」と対になることばで、父・母の兄、または父・母の姉の夫という意味だが、この物語においてはそれほど厳密な意味でこの語(文字)が用いられているわけではないだろう。

八十年輩の男が町の見物にやって来て、ついでに私のところに立ち寄って行った。九十キロほど離れた山のふもとで県営の種蓄場の獣医をつとめている人だった。日に焼けた小柄な老人で。それが、たしか、さきおととい。日曜日の午後、私が本を読みながら廊下を行ったり来たりしていると玄関の戸が開いて彼が、入って来たのである。行商人のように上がりカマチに腰掛けて。自己紹介してから、わしはあんたの伯父ですと言った。

この男は、私に会うために来たのではない。町の見物にやって来たのである。そして、ついでに、私のところに立ち寄ったのだ。この、ついでにということばは、この男の口からそう語られたのだろうが、それはおそらく、この男の、私に対する遠慮を表している。八十年輩になり、つまり人生の終末に近づいて、老人の心の中には、自分の生まれた町、家、血のつながる者、そういうものへの郷愁が募ってくる。しかし一方、故郷を離れてからの何十年もの間、まったく寄りつき

もせず、従って今日まで、伯父らしいことの何ひとつしてこなかった(実はできなかった)ことからくる負いめ、後ろめたさも、同時に強かっただろう。そこからくる遠慮である。そしてそれは、「行商人のように上がりカマチに腰掛けて」という姿勢にも、はっきりと表れている。

来訪者のそのような複雑な内面はそれとして、私にとっては、平和な日曜日の屋下がりの、まったく突然の出来事である。

八十年輩でなおかつ現役の獣医ということは、当人の頑健さを表しているとも言えようが、一方、その年になってもなおかつ働かなければならないという、決して楽ではない彼の生活状況を示している。

ぼくの伯父さんは父方と母方と合計二十一人もいて。だがそのだれとも一度も出会ったことが、私はなかったけれど。ただこの二十一人の中の四人の死亡については人から聞いたことがあったので。それはほんとですか、と思わず聞いた。

いわゆる産めよ殖やせよの時代であった。しかし、国策によって産み殖やしはしても、当時の農村社会に、そのたくさんの子供たちを、まっとうに育て上げるだけの経済的な基盤があったわけではない。彼らは一定の年令に達すると、故郷を捨てて(というより、故郷に捨てられて)、自分の身ひとつで生きて行く道を、他に求めるしかなかった。たとえば外国への移民、あるいは帝国の軍人として……。しかし、出かける者の希望がどんなに大きくても、送り出す者の歌声がどんなに勇ましかったにしても、外国や軍隊における現実の生活は、故郷での苦しいそれに比べて、より楽であったとは決して言えまい。故郷に錦を飾る成功者は、ほんのひとにぎりの者に過ぎなかった。

ぼくは、二十一人もいるはずの伯父さんの、そのうちの誰とも出会ったことがない。つまり、誰ひとりとして(ほんとうの意味で)故郷に帰れた者はいなかったのである。そういう貧しさであり、そういう時代であった。

故郷に捨てられた者たちは、成功しない限り故郷へ帰ることができない。成功した者は、故郷の貧しさを

いくらかでも救うことができるからであり、そうでない者の苦しさを助けることができる故郷ではないからである。

そして、時だけが経っていく。その時間の経過の中で、彼らは望郷の思いを切なく募らせるが、反対に故郷の方では難郷者たちのことをしだいに忘れ去っていく。そして彼らが帰郷できる第2の方法は、死亡である。死によって故郷はその人のことをやっと思い出す。「先祖代々の墓」に葬られた者は、貧しい故郷に対してもはや何の負担も迷惑もかけない。だから受け入れられるのである。それが二十一人の中の四人であった。「それはほんとですか」という問いは、いったいどういう意味なのだろうか。つまり、この問いの中の、「それ」という指示語は、何を、どのようなことを指しているのだろうか。考えられるのは次の2通りである。

- (1) あなたが私の伯父さんだというのは、それはほんとうですか。
- (2) 四人の伯父さんの死亡について人から聞いたことがありますか、それはほんとうですか。

もし(1)のように考えると、物語の後の部分とのつながりがおかしくなるし、かといって(2)のように考えると、こんどは反対に前の部分とうまくつながらない。

この問題を解決するには、(1)(2)の持っている矛盾を矛盾のままに、そのまま統一すること、つまり、別のことを言っている(1)(2)のふたつを、同じことを言っている、と考えるしかおそらく方法がない。内容に即して言えば、次のようである。

私にとって、人づてのおぼろげであっても伯父さんとして具体的にイメージできるのは、死亡した四人しかいない。他の者は十七人という数でしかない。したがって、突然の来訪者が「あなたの伯父です」と名のつたとき、私にはとっさにその四人のうちのどれかをその来訪者に当てはめるという考え方ができなかつたのである。もちろん矛盾ではあるが。「……と思わず聞いた。」という聞き方が、伯父さんの突然の出現に対する私の驚きと、この質問が持っている非論理性とをよく表している。

わしはサンフランシスコから来たものではありません。あの伯父さんはとっくの昔に死にましたからね。と彼が言い急に百五十歳も年とったように見えた。すると私は思い出した。サンフランシスコに移住した伯父というのは農業労働者で、五尺そこそこの小男で。ジープを運転して。よく舗装された自動車道路を進んでいくと、横合いから別のジープが飛び出して来て。ブレーキを踏んだがまにあわず、衝突してしまつたところが、その

ジープから一人の男が降りて来て棍棒でぼくの伯父さんの頭を殴りつけた。続けざまに三回。伯父さんはその場で死んだ。目撃者の話によると伯父さんはオケサ節を歌っていて相手の男は身の丈二メートル三十センチあつたそうである。そして訪問者はあいかわらず上がりカマチに腰掛けていた。

私にとって伯父さんの話は、はるかな昔の話である。それは何十年前かの実際のできごとというよりも、百五十年も前の、「むかしむかし……」と語り出されるおとぎ話のような非現実的なものである。何しろ、どの伯父さんとも、ただの一度も会つたことがないのだから。

四人の死んだ伯父さんのうちの一人。彼は、ほんのひとにぎりの成功者の話にひかれて、新天地アメリカへ農業労働者として移民していった。しかし、そこに待っていたものは、生活苦だけではなかつた。人種や民族に対する偏見。黄色くて小さい東洋人は、白くて巨大なアメリカ人から、人間として扱われなかつた。全く無法に、まるで虫ケラのように殺されたのである。

その伯父さんは、死の直前に故郷の民謡を歌っていたと伝えられている。おそらく故郷に対して何ひとつ楽しい思い出を持ってはいないこの難郷者は、なおそのゆえに、燃えるような熱く哀しい望郷の思いを抱いていたのである。

わしは感電したことなどありませんよ、あれはもう一人の伯父さんですと老人が言った。すると私は思い出した。その。もう一人の伯父さんは工場の中で高いキャタツの上に腰掛けていて。それが仲間のスイッチの切りまちがえて高圧線に触れて死んだ。目撃者の話によると、その時。大工場の内部が山中の大雷雨になって一面に青く光り、伯父さんの目から盛んに火花が四方八方に飛び散つて。それから黒焦げになつた伯父さんが落ちて来たそうである。そして訪問者はあいかわらず上がりカマチに腰掛けていた。

死んだ伯父さんの話その二。彼はどこかの町の工場で感電死したのである。農村で生まれ、その少年時代を土に親しみ魚を捕つて過ごしたであろう彼にとって、喧騒に囲まれ塵埃にまみれた出稼ぎ先の町の工場は、いかにも慣れにくいものであつただらう。そしておそらくは、スイッチを切りまちがえた仲間も、同じような難郷者であつたかもしれない。

「大工場の内部が山中の大雷雨になって一面に青く光り」という壮麗な比喩、「伯父さんの目から盛んに火花が四方八方に飛び散つて」といういっそ壮厳とも

いえる光景、そして「それから黒焦げになった伯父さんが落ちて来た」という凄絶な描写。安全対策や労働条件というものに、ほとんど注意を払わなかった、当時の企業や国家の体制の、犠牲者であったと言えるだろう。兵士を消耗品としか考えなかったのが戦争だったとすれば、工場もひとつの非情な戦場だったのである。

馬が前へ進まないで、逆戻りしたものですから。老人が言った。私は思い出した。さらにもう一人の伯父さんのことを。彼は電報配達をやっていて、自転車をこいで全速力。村道を走って来た。雨上がりで道路はでこぼこしていた。ちょうど曲がり角で水たまりの穴に落ち込み彼の自転車が横倒しになって。そこに石炭マンサイの馬車が、馭者なしに停車して。その馬が後じさりして来た。自転車から投げ出された伯父さんの腹部に、馬車の車輪がのしかかって来た。馬は後じさりをやめなかった。わしが駆けつけて馬を押さえた時はもうおそかったのです。あなたの伯父さんは細長い叫び声をあげていましたよ。あいかわらず訪問者は上がりカマチに腰掛けてこう言っていた。こんどは彼自身が目撃者なのだった。では、あなたは未確認戦死者ですか。と私は言った。四人のうちの最後がそれだったからである。

伯父さんの死その三。電報配達をしている途中の事故死である。当時電報といえば、たとえば戦死を知らせるとか……とにかく、時ならぬ時にドンドンと戸をたたいてやって来る「電報です！」の声は、たいていは不吉な知らせであった。だからそれを運ぶ配達夫は、おそらく重い気持ちで、しかし一刻も早くと、気を急かせていたに違いない。雨上がりなのでこぼこ道を、全速力で自転車をこいでいた伯父さんの、仕事への誠実さと、彼を襲った突然の災難とがよく表されている。

いや、あれはどこかの新興都市の白いビルディングの地下で白骨になっているでしょう。だれも見つけないが。あいかわらず上がりカマチに腰掛けて訪問者が言った。

伯父さんの死の話その四。四人目は「未確認戦死者」として私に（故郷に）その死が伝えられている。戦争で死んだのだが、いつ、どこで、どのようにして死んだのか、まるでわからないということである。このような死者は、本土をも含めて、広大な地域が戦場になっていたことを考えると、数えきれぬほどあったに違いない。そして彼のように、戦死が確認されない

場合、本人もその家族も戦死の名誉というものを、精神的にも物質的にも（見舞金や年金など）、国家及び周囲の人々からいっさい受けることができなかつたのである。

数えきれぬ死者が、だれにも確認されずに（死者が死者を確認することはできず、生者は自らの生を維持することに精いっぱいである）土中深く放置される。そしてその上に、しゃれたビルディングが建ち、新興都市が出現する。つまり、あのたくさんの死者の死の意味というものが、深く考えられることもなく、新しい時代、新しい生活が始まるのである。それが戦後の復興であり、繁栄というものであった。

死んだ四人の伯父さんの話をしている間、訪問者は終始「上がりカマチに腰掛けたまま」で、作者はそのことを四回ともくり返して書いている。このことは、訪問者が遠慮の姿勢を崩していないともいえるが、それよりも、私の方で、次々に明らかにされる伯父さんの死に呆然としてしまつて、上がることをすすめるのを忘れていたのである。

採り立てのイワシが三ダースほどありますから。オリーブ油で揚げて、食べましょう。お上がりになりませんかと私は老人を誘った。ぱつと喜び彼は立ち上がり。しかし上がろうか上ががるまいかと思案している様子だった。手に持っていたバスケットを上がりカマチに置いて。これから町を見物して来たいが、案内してくれませんか。なにしろ初めて来た町ですからねと彼が言った。私はすぐさま承知してバスケットをそこに置いたまま訪問者といっしょに町へ出た。

海辺の町に住む私にとって、魚は珍しいものではない。ことにイワシはそれほど高級な魚ではない。しかし、「九十キロほど離れた山のふもと」からやって来た老人にとっては、たいへんなごちそうだ。それにもまして老人は感激している。今まで何ひとつ何ひとつ伯父らしいことをしてやらなかったばかりか、何十年間寄りつきもしなかった自分が、ある日突然に「あなたの伯父です」と言つて現れたのに対して、この甥は嫌な顔もせず迎えてくれたばかりか、新鮮なイワシまでごちそうしてくれようとしている。やっぱり故郷だ。老人は生まれて初めて、故郷の暖かさを感じている。死ぬ前に一度故郷へ行つてみたいが、果たして行つてもよいものかどうか、そういう数十年来の迷いと不安が、一瞬に消えたのである。老人の顔は思はずほころぶ。

それにしても、老人は、ほんとうに初めてこの町に来たのだろうか。後に続く「町に出ると老人が先に立

ちすたすたと歩き」などからみて、どうもそうではなさそうに思える。それでは老人はうそをついているのか。そうとも思えない。そんなうそをつかなければならない理由がない。

とすれば……生まれ故郷とはいえ、老人はかつてこの地を捨てた人間なのである。志成らずんば死すとも帰らじの思いで。そして老人は、実際に何十年もの間ここを訪れていない。その間にここは、新しい町と言わねばならぬほどに、すっかり変わってしまっているのである。その激しい変化の中で、老人は、何十年間変化していない心の中の風景に導かれて、先に立って歩き始めたのである。

町に出ると老人が先に立ちすたすたと歩き私がそれを追いかけた。町は一本のよく舗装された道路になっていて。小柄な老人はコウモリガサを開いて風に吹かれふわふわと飛んで行くように見えた。町には大雨が降っていたが、ここだけ晴れていて、しきりに雨と自動車のクラクションの音がしていた。私は風に吹き飛ばされた帽子を追いかけるように訪問者を追いかけた。すたすたと走った。一本のよく舗装された道路は、海へ突っ出していて。老人はやがて歩みを緩め私と並んで長い長い突堤の上を歩いて行った。ハミングで何やらやりながら。両側が海で一キロも二キロも三キロもある突堤である。とうとうそのいちばんはずれまで来た。さあ。戻って、イワシを食いましょうよ。私は言った。まあ待て。老人はこう言う。服を脱ぎ海に飛び込んだ。飛び込んで、それっきり見えなくなった。

故郷はすっかり変わっている。あの懐しい田の畦道や小川も今はない。代わりに「一本のよく舗装された道路」と「自動車のクラクションの音」とがある。しかし外観がどんなに大きく変わっていても、やっぱり懐しい故郷であることに違いはない。「風に吹かれふわふわと飛んで行くように」足取りも自然に軽やかになる。現実の町には大雨が降っていても、老人は今、入道雲のわき立つあの夏の空の下を、子供のように駆けているのだ。しきりとする雨の音や自動車のクラクションの音も、降るような蟬時雨やかん高い雲雀の鳴き声に聞こえているのかもしれない。足は自然に、子供のころに泳いだあの海の方へ向く。あそこ歌った歌さえが、ついハミングになって口を突く。ああ、海だけは昔と少しも変わっていない。老人は年を忘れて飛び込んでしまう。

「さあ。戻ってイワシを食いましょうよ。」という私のことばに対して、老人はつい我を忘れて、「まあ待

て」と、少年の甥に伯父が言うような口ぶりになる。それまでは、「……です」「……してあげませんか」というような言い方をしていたのに。

どうしたものだろう。三月で空気が冷たくて海ときたらますます冷たそうだった。とても海に飛び込む気はしなかったが。見ると沖に老人の丸い顔が現れ。顔の真ん中に丸い口が開き何やら叫んでいたが何を言っているのかわからなかった。顔はまた海中に没してしばらくすると岩壁をよじ登り訪問者が突堤の上に出て来て服を着けハンチングをかぶった。私たちは帰路につき近道してマーケットを通り抜けて行った。

海の中から老人は、何を叫んでいたのだろうか。「おーい、おまえもいっしょに泳ごうよ」と言っているのだろうか。それとも「やっぱり海はいいものだなあ」と言っているのだろうか。いずれにしろ老人は、いまやすっぽりと故郷のふところに抱きかかえられているのである。

わしのおやじのやつ、わしをいきなり海にほうり込んでね。と道々老人はキリアゴをガクガクさせて言った。たしかわしが七つの時だったから、あれから八十年。いや七十七年かな。おもしろいもんだ。それっきり海に入ったことないんだが、試してみたら今でもちゃんと泳げるじゃありませんか。ここで老人はとてつもなく大きなクシャミをした。やっぱり非常に寒かったに違いない。

私たちはイワシをから揚げにして食べた。食べ終わると訪問者は白いゴムの手袋をはめていて。馬には産婆なんかいませんがね。それでも立ち合わなくちゃあ。

何十年たっても、どんなに年をとっても、故郷の町がどんなに変貌してしまっても、でも変わらないものがある。あの大きな海。そして、おやじが自分の体に遺してくれたもの、泳ぐ能力。大きなクシャミをしながらも、老人の心は暖かくなっている。これが故郷というものだ。

おいしいイワシを食べ、老人は再び、自分の生活へ帰って行く。しかしこのつかの間の帰郷は、彼に再び、生きる力のようなものを与えたようである。出産を控えて、自分を待っていてくれるあの馬たちへの、新鮮ないとおしみの気持ちがよみがえる。

こういって老人はバスケットをぶらさげレーンコートをひらひらさせバス・ストップへ手を振り

振り走って行った。

老人が手にぶらさげているバスケットの中には、いったい何が入っているのだろう。どうも何も入っていないからっぽだったように思える。伯父として、初めて会う甥への手土産のひとつでも入れて来たかただろうに。

それにしても、故郷は老人にとってははるかに遠いものであった。それは九十キロという地理的遠さではなく、八十年（あるいは七十七年）という、時間で測られる遠さであった。初対面の甥に手土産ひとつ持って来ることができないという、貧しさが隔てている悲しい遠さでもあった。老人は以前、何度かこの町へ足を向けたことがあったに違いない。そしてこの日も、私の家の前までやって来て、思いきって中に入る前に、何度も行ったり来たりしたに違いない。

そして、「手を振り振り」バス・ストップへ走る老人の心は今、暖いものでいっぱいにくらんでいることだろう。手にぶらさげているバスケットも。

ぼくは、老人がいったい誰なのか、ほんとうに自分の伯父さんであるのかどうか、最後まで決めかねている。老人のいろいろな話を聞き、いっしょに町の見物をし、イワシを食べさせてあげたりしながらも、最後まで伯父さんとは呼びかけていない。「訪問者」「老人」で通している。二十一人もいる伯父さんに、今までだれとも、一度もあったことがないということから考えるとやむを得ないことかもしれない。かと言って、相手がうそをついて自分をだましていると考えているわけでもない。

しかし、あまりの唐突さに対する最初の驚きはともかく、死亡した四人の伯父さんの話を聞かされているうちに、ぼくの気持ちはしだいに変わってくる。イワシをごちそうするために「お上がりになりませんか」と誘ったとき、老人は「ぱっと喜」んで立ち上がるのだが、その様子を見て、ぼくのほうもうれしくなってしまう。町を見物して来たいという老人の申し出にも、私は「すぐさま承知」する。

一度も見たことのない二十一人の伯父さん。目の前の老人がその中のだれであると特定することができないだけに、二十一人全体に対するほのかないとおしみの気持ちが出てきたのかもしれない。それはまた、ぼくの伯父さんたちでなく、伯父さんたちの世代一般に対してのものであったろうか。

「今まで一度も会ったことのなかった伯父さんたちの、突然の来訪によって、ぼくの心の中に残された不思議な印象」というふうに主題を考えてもよいと思う

が、たしかに不思議な物語である。「町には大雨が降っていたがここだけ晴れていて」とか、「両側が海で一キロも二キロも三キロもある突堤である」とか。また、伯父さんはほんとうに、三月の冷たい海で泳いだのだろうか。何しろ八十歳を越える年なんだから。だいたいこの老人はほんとうに私の伯父さんだったのだろうか。

そんなことを言い出せば、老人はほんとうに私を訪ねて来たのだろうか、そんなふうにはさえないでくる。日曜日の昼下がり、昼寝に見た夢の話ではないのだろうか。

でなければ、これは大人の童話なんだ。突然の来訪者が、「わしはあんたの伯父です」というセリフを言ったとたんに、私は急に子供になり、メルヘンの世界が展開し始める。故郷と呼ばれる、土地と人間とのつながり、家族や血縁と呼ばれる、人間と人間との絆、それらの中でわれわれは生きているのだが、そのつながりとは一体何なのだろう。うそとほんとうの間の淡いものやのようなもの。この物語自体が、そういう童話の表情を持っている。いくらかのほのぼのとした暖かみと、いくらかの寒いようなもの哀しさと。この世のすべての童話は、これら二つを必ずあわせ持っている。

心理的な間や、感情の流れに忠実に、いわば話しことばの句読法を用いたこの特異な文体の小説は、一つひとつの語句や表現をていねいに押さえながら主題を探っていくという読み方を、拒んでいるように見える。そのようにして読み終えたとたんに、何かたいせつなものを取り逃がしてしまったのではないか、そういう思いが残るからである。

人間の体の、形を造り支えているものは骨格だ。骨がなければグニャグニャと、それこそアメーバかにかのような不定形の生き物になってしまう。しかし、われわれがある人物に対してある印象を形成するのは、骨格に対してではない。骨格の回りにある筋肉、その全体を覆っている皮膚に対してだ。顔の皮膚の様子を「表情」と呼んでいるが、とりわけその「表情」というものが、その人の印象を形成する最も大切な要素になっている。

しかし、表情はさまざまな印象を形成する。この物語の表情も、読む人に実に多様な印象を与えるに違いない。しっかりと骨組みを押さえた後で（薄っぺらな感覚読み、印象読みにならないために）、各自自由に、この物語とつき合っていけばよいのかもしれない。

（本文は、三省堂版「現代文」によった。）